

海外登山の現状と今後

海外委員会 竹花 晃

海外はおろか国内を含めてもたいした登山をしているわけでもなく、海外遠征のあるべき姿などという大それたことを述べることはできない。しかし、JICAのシニア海外ボランティアでネパールに2年間住んで以来、ほぼ毎年ネパールをはじめ海外の山に出かけており多少の知見はあるかもしれない。ヒマラヤを中心とした日本隊の海外登山の現状や、もう少し対象を広げてトレッキングについても考えてみたい。

日本ヒマラヤ協会の機関紙「ヒマラヤ」No.458に、「2010年ヒマラヤ登山日本隊リスト」があった。それによると、ヒマラヤ登山隊数は58隊あった。

中身を見てみると8000m峰が17隊で全体の29%、7000m峰が9隊で16%、7000m未満が32隊で55%である。8000m峰ではエベレストまたはチョモランマが5隊、マナスルが4隊で、この2峰だけで8000m峰の隊の半分以上を占める。同じくNo.457によれば、2011年春の国別エベレスト登山隊の人数は、日本は21人で4番目、1位は米国の68人である。その多くは公募登山であろう。公募登山が個人や山岳会では行きにくい多くの人にとって一部の8000m峰を身近なものにしていると言えよう。

7000m峰では公募隊は少なく、松本CMCのランタン・リルン東壁や、ギリギリボーアイズのラック1峰北壁など意欲的なルートを目指す隊も目立つ。公募隊の目立つ8000m峰とはやや違う傾向を示している。

6000m峰を中心とした7000m未満の山は、メラ・ピークやチュルーをはじめとするポピュラーな山から、ヤカワカンやシャーチャンラのような初登頂を目指す隊、四川省の牛心山の南東壁の初登攀をした山梨県岳連隊のようにさまざまだ。探せば、少人数のグループや単独の山岳会でも、短期間で経費を余りかけずに楽しめる山が沢山ある。落穂拾いと言われようが、未踏峰も多く存在する。

なお、リストにはアイランド・ピークやヤラ・

ピークなどツアーディナーは入っていないので、それらを含めると6000m前後の山の公募登山の数や割合は相当増えるだろう。

公募登山または商業登山に批判的な人がいる反面、逆に肯定的にとらえる人もいる。個人としては行きにくい高峰に行けるようにした公募登山のメリットは大きい。一方、全てお任せでガイドに助けてもらい高峰に登ってもそれが実力だと思つてはならない。海外に行かなくても国内でバリバリやり、実力のある人もいる。

自ら現地と連絡を取りながら遠征計画を立てるのは大変だが、それは登山の一部でもある。できれば商業登山に頼らず低い山でもよいから自ら遠征計画を立てて実践して欲しいものだ。うまくやればかなり安上がりにもなる。

最後にトレッキングについて一言。日本人の殆どがツアーハイクによるトレッキングで、エベレスト・エリアなら、ナムチ周辺か、足を伸ばしてカラパタールかゴーキョ・ピークばかりである。横のルート、例えばチュクンや、カラパタールとゴーキョへの街道を結ぶチョラ・パスとなると違った景色が楽しめるが日本人は非常に少なくなる。

アンナプルナ方面においてもトロンパスを越える日本人も少しあるが、マナンから一泊二日で入れるティリチョ・レイクには日本人はまず見かけない。ティリチョ・ピークが間近に聳え、神秘的な湖は素晴らしいのだが。

日本人は高年齢層で、語学の問題はあろうが団体ツアーハイクに頼らざるを得ない人が多く、トレッキングも定番コースに偏りがちだ。一般的に外国人は少人数で日本人がほとんど行かないチャレンジングなエリアにも分け入る。長期休暇が取りやすいというお国柄もあるが、年齢層もさまざまだ。日本人は定番のコースだけでなくもっと幅広く、また多少冒険的なエリアも含め楽しんで欲しいと思う。